

東北 VALUE SIGHT 宮城



株式会社山形テレビ 取締役報道制作担当
熊谷 功二 (くまがい・こうじ)

1952年、宮城県気仙沼市生まれ。
1978年、朝日新聞社入社。宇都宮支局を振り出しに、東京・社会部、長野支局、広報室などを経て、99年から2002年まで山形支局長を務める。
2010年6月、山形テレビに出向、現職に就く。
「気仙沼さんま祭りin山形」については下記を参照。
やまがた気仙沼会HP
<http://with-kesennuma.net/index.html>

(社)全国さんま漁業協会の調べによると、2010年の宮城県気仙沼港のサンマ水揚げ量は25,022トンで、北海道花咲港(根室市)に次いで全国2位であった。しかし、震災が発生した2011年は5,634トンで、前年比23%に落ち込んだ。「サンマのまち・気仙沼」を今一度取り戻そうと、やまがた気仙沼会のメンバーが立ち上がった。

やまがた気仙沼会を結成

あの東日本大震災がなかったら、ここ山形で故郷・宮城県気仙沼のために一肌脱ごうとは、考えもしなかったに違いない。

今年の9月23日(日)、山形市の霞城公園で、気仙沼のサンマ2,000匹を炭火で焼き、市民に無料で提供する「第1回 気仙沼さんま祭り in 山形」を開く。主催は気仙沼出身者を中心に組織する「やまがた気仙沼会」。祭りの実現に向け、会員を突き動かしているのは、故郷の変わり果てた姿だ。

「三陸は、遠い」。山形市で暮らしながら、故郷をそう感じていた。1999年、初めて山形に赴任した時、知り合いになった同郷人は武田満・山形新聞社取締役(当時。現東北オフセット社長)1人だけだった。

だから、2010年6月に山形テレビに移り、社内に同郷の後輩の小野寺毅さんがいることを知った時はうれしかった。間を置かず、故郷の遠い親戚の熊谷太郎さんが山形で酒造りをしていることが分かった。

2010年12月、山形市内の小料理屋にこの4人が集まった。全員、気仙沼高校出身だから、話題の中心は故郷や高校のことになる。どうして山形に来たのかも披露しあった。「気仙沼から遠い山形で、みんな頑張っているなあ」と思った。

その席で「やまがた気仙沼会」を結成し、経歴などから武田さんを会長に、私が勝手に幹事長になった。「もっと同郷の人を探し、もっと賑やかに飲もう」と氣勢を上げた。よく思い出せないが、酒の勢いとばかりもいえない。大げさに言えば、外国で同胞に会った時のような安心感、心地よさであろうか。普段、山形弁も話せず、どこか取ってつけたような標準語を話している者が、子どものころから慣れ親

山形で三陸を想う 「気仙沼さんま祭り in 山形」開催まで

しんだ気仙沼弁で話すのである。楽しくないはずがない。

震災で気仙沼会が変質

明けて2011年1月、2度目の飲み会をそば店で開いた。4人がそれぞれのコネクションを使い、呼びかけた結果、7、8人が集まった。盛り上がったのはいうまでもない。そば店の客の1人が気仙沼出身で、急きょ参加するハプニングもあった。

「また集まろうや」。そう約束して別れて間もなく起きたのが、大震災だった。

3月25日、久しぶりに集まった同郷人たちに、かつてのはしゃぎはなかった。身内が亡くなった人、実家が焼失した人、親類縁者や知人が被災した人…。

さて、会として今後どうするか。まさか、今までみたいに酒を飲んで騒いでばかりもいられまい。山形で、何か故郷のためにできることはないか。「郷土愛」とでも言うのだろうか、いても立ってもいられない心境だったような気がする。

だれかが「気仙沼からサンマを持ってきて、山形の人に食べてもらい、義援金を募ったらどうか」と提案した。気仙沼漁港は全国有数のサンマの水揚げを誇る。東京では毎年秋、気仙沼から運んだサンマで「目黒のさんま祭」が開かれ、新聞やテレビで紹介されている。その山形版だ。幸い、小野寺さんの実家はサンマを卸していた。「親父に聞いたら、何万匹でもタダで持って行くって」。話はまとまった。

目黒を基準にさんま祭り開催へ

とはいえ、何をどうしたらいいのか、だれも分からない。ここでまた幸運に恵まれた。目黒のさんま祭を立ち上げ、実行委員会会長を務めている松井敏郎さんが、武田会長の小、中、高校の同級生で親しかった。松井さんに山形に来てもらい、話をうかがった。話ばかりではいまいち様子が分からない。目黒まで行って、実際に見ることにした。

9月18日、目黒では7,000匹のサンマを用意していた。会場の公園に入るための行列が延々と続き、混んではいたが、人の流れはスムーズだった。過去15年の蓄積で、ノウハウが確立されていた。目黒を基準にして山形の祭りを考えることに決めた。

本格的な祭りを催す前に、その年はまず準備大会を開いた。

10月15日、馬見ヶ崎川に架かる国道13号の橋の下を会場にして、サンマ300匹を準備した。目黒を真似



2011年10月に開催した「さんま祭り準備大会」。今年の本大会へ向けて大きな弾みとなった。

て、U字溝に炭を敷き、特製の網をかぶせて焼いた。混乱を防ぐために、事前のPRは一切せずに口コミだけで客を集めた。それでも200人ほどが訪れてくれた。一部新聞、テレビも報道してくれた。もちろん、課題もたくさん見つかった。それも含めて、準備大会としてはまずまずだった。

祭りが山形と三陸の架け橋に

今、本番に向けて、追い込みにかかっている。企業や個人からの協賛金集め、数十人のボランティア確保、三陸の物産の出店者探し、関係官庁への届け出、数十張のテントの手配、U字溝の購入と加工、事前PR、県産の農畜産物食品を出店するJA全農山形との調整…。一つ片付けるとまた一つ新たな問題が浮上する、といった具合だが、約15人の会員がそれぞれの分担業務をこなし、着実に前進している。

その過程で、会場として霞城公園を提案してくれた山形市をはじめ、紙皿やしょうゆなどの現物を提供して下さる企業など、多くの方にご支援をいただいている。この機会に感謝申し上げたい。

さんま祭りは義援金集めだけが目的ではない。震災から1年4カ月が経過し、風化しがちになる被災地のことを忘れないでほしい。「被災地の復興なくして東北の復興はない」(吉村美栄子山形県知事)という言葉思い出してもらいたい。気仙沼を含めた三陸と山形との心理的な距離が少しでも縮まり、人やモノが気軽に往来するようになってもらいたい。それが結果的には山形の利益にもつながるはずだ、と信じている。

秋の一日、サンマをほおばった山形の人たちが三陸に思いをはせてくれたなら、祭りは大成功である。